特別
へ4
8151
3

貴
14
8151
8

稽古和謌集巻第五

賀哥

堀河院御時立春の銀の盃に侍りける

源俊頼朝臣

君が為千歳をかけて水よりも我が姫松ぞ根をはやしける

寛喜元年女御入内屏風に京美人家に元日書たる所

前関白

初春の花咲都よ松とうゑて民ぞ千歳を祈る

宝治貳年正月後嵯峨院に松色春久しきを

事成籠りわけて

色人の松の葉はかりあるよ長はつさしてあそうしき

京極殿あるく初て人〳〵に見はしりよ

松有春色はいつ事成

摂政太政大臣

をしうて木成も長はつ成なみ松をあ成の色はこうめ

太上天皇

新樹の松りも成の色みて今浦々の宿の池に

とりの松りも松有徳色はこうる事成はか

畏屋入道前摂政太政大臣

ちうて次てよ浦りの松りけ

御製

名人の松の名成うえ人〳〵和りまと百代の長

良岑の孫成の四十の猛よ娘ようて侍りけ

小辨

百代を松あて老成い子はる葉はつ成の

竹蔦成

伏見院御製

玉敷の庭はは竹幾成も

元弘二年立后四尺屏風よ花の木よ蔦所

後宇多院宰相典侍

立ちの御代の春とも誉の花の鶯の初音をもけかるん

太上天皇

梅の花の代は昔の春とはいつくしきあの誉の志

元康の御こゝの七十代の後の屏風に侍て

書けり

紀貫之

春の宿りの月の夜梅の花の香のみ分けしてみな

鳥羽院位をさりさかの御法庭花年久しきを

心とゝまらしかはるよ侍りけり

大納言忠教

うち梅の家の梅の花の香ハ年をつゝむかのかゝり

嘉元三年二月十六日内裏にて梅花盛久しいふ

題を講ぜらるゝけるゝ

金光院入道前右大臣

梅の枝の花ゝのき匂ひ雲井の春を風ぬけき

延長七年十月元良親王四十賀女八の足こう

侍けり時の屏風に内の仰よりて

貫之

久敷も匂ん春の梅の花ハ春の初よりん

花奥巡年とゝ春の人をゝ人のこゝろはゝ

ゝ侍けり償分のゝけ

堀河院御製

内侍のかみ右大将藤原朝臣の四十の賀し侍りける時に四季の屏風に書き侍りける

素性法師

山高み雲居に見ゆる桜花たをれば袖ぞ匂ひぬべき

應德元年三月中宮にて花契多春といふ講侍りける

大納言俊明

君が代の春を契りて花の枝に千とせ経ぬべき心地こそすれ

内裏百首に禁中花

左大臣

春風にちりぬべきかの桜花雲ぞ残りて匂ひ来にける

達智門院后宮の法華堂にまかりけるに

後醍醐院御製

侍りしかば匂ひ来にけり春風の吹きとおぼゆる御声

達智門院

今ぞ知る春の花もひらけくる我が身ぞ人の嘆きなりける

嘉元三年三月鳥羽殿の行幸に池上花といふ事を読侍りける

池水の底さへ色深く見なしたる事共

堀河院御製

池上花咲たる事共

中御門右大臣

我宿の藤なみ咲る池水よ深くも物の花の色かな

人の知りたる所あく藤の花をかざして

侍人不知

打ちなびく浪の花とぞ咲よりは我れ杖ぬや去ぬらん

正三位知家

なる日は藤の花を見てあらしに沖の石波水

左大将実相公取勝講に参りて侍けり

後鳥羽院下野

藤浪の新しき梅こ笠山人の越なる樹ぞ見る

宗徳院位に上り給ひ事を講ぜられけり時雨中早苗と云

後法性寺入道

早苗とる今しも雨の降ぬ事八世の末の見ぬ袖ぞ濡けり

五月五日枇杷皇太后宮に菖蒲の根を奉り給

上東門院

菖蒲くらべと絶なる菖蒲草五年ぬ杖の根ぞやくん

正應貳年関白詔命して五月五日藥玉を奉て
近衛関白前右大臣
養し給ける
[illegible]侍り菖蒲を今朝[illegible]
伏見院御製
御返し
菖蒲草[illegible]
寛治元年大嘗會悠紀方屏風に高野村五月雨
前中納言匡房
郭公[illegible]
正安三年七月内裏七夕七首の内
萬秋門院
[illegible]
圓融院御時中將公仲碁はしりの屏
業り白金の籠り
小野宮右大臣
[illegible]
八月山路に来て[illegible]
前関白
今[illegible]
宝治百首の内秋田
小男鹿の妻
前中納言基良

風渡る民の家の軒の秋
家り十首の歌作りける時
山階入道左大臣

雲ゐ水鏡をのくて久堅の
寛治八年八月十五夜鳥羽殿
富家入道前関白太政大臣

幾とせ流れすみ池の
月しをを歌作りける
大納言公實

歌とりにさそはぬ池の水うれ
長雨あて流れの月新

建仁元年八月十五夜和歌所の撰歌合に月多
秋夜
後京極摂政

月のみ秋の夜ん若代り秋は今宵の光なりけ
藤原為頼朝臣

水のよりひりさやけき秋の月百代ふる境なし
寛治八年鳥羽殿にて
権中納言俊忠

長雨なる光をうへて流れよ百代の秋
後鳥羽院御製

いかにせんの海上の月の沈を移れの池に

建久五年八月十宮御方にて月契秋久しと云
事は侍はべり

正三位季經

雲井にはいく千代の秋の山里
後一条院御さかりの九月隈なく
月はあれど大二条関白中将に侍りけるとき
あきの人こけるものかくれ池上の家の
なり渡りの行幸に海辺の紅葉しるく
みゆ侍りしかば

紫式部

墨なくて年ふる水は面よりの月の影とぞ
後宇多院御業の時船慶門院に御幸ありて
人々歌よみをしく召れ侍りし

前大納言實教

雨ふれば水くきの岡の蓮の葉の
宗德院御時法金剛院に行幸ありて菊契
千秋といふ事は講歌にはべりけるよ

待賢門院堀川

雲は空にはるかに菊の花の
文治六年女御入内屏風に山中に菊盛り
開きたるかたに他人有所

限なき花山路の菊は陰なれど雪を乗り越えん

永徳三年大井河に行幸の日内裏先に

けり

前中納言定家

梅の香を袖にうつすは春の風

花の姿は雪かとぞ見る

辨乳母

山川の菊は下枝にうもれて人の花ぞ枯れぬる

菊花は久しきものを

藤原興風

いはり花をあれはをかんと

大宰権帥為経

後冷泉院御時殘菊映水といふを人々

よみけるに

権大納言長方

神垣の瑞の河の白菊をひさしき秋のきるとけり

負信公家の屏風

元浦

神垣の瑞の河の常盤木に百代の齢は白菊

建仁二年和哥所にて釋阿は九十の賀給ハ

ばけり時の屏風

前中納言定家

花山の院の御賀の重陽の日とよ年物の通のひりをそ分

十二月花園院御出家
君のいとまを惜しみて侍りける山の方
俤忘がたきよしなどのことを申ける
ちり侍りなんを惜しみ侍りける

権大納言忠光

天地をうけ給て年の老にけるや白雪を山と成ん
上東門院御屏風に十二月毎に書侍る所
侍り

後朱雀院御製

一とせ給事なく行かはしぬきはなきを結よ

前中納言定家

尤太臣は表なりて年月多く後に侍
大政太臣に任して侍る時入道前大政太臣家
ゆく蔵書は家に多侍りける

前大政太臣

君惜しみ花を尤木に思ひ入て花園院年の書

二条院御製

天の下人は人を晴めるんこの狩日は墨なりける

永徳元年六月十二日三十首の歌侍る時

寄道祝

治世の御代の上にして今をよみてさうの数鳴の道

尤太臣

東三条院東宮御方にまゐらせ給へる
うちのひけるうた

小大君

君院は御方にかはらせ給ひけり河の田鶴をきいてゐる

前大納言為氏

和田津海の真砂は数よ篠竹の八ふしき若の手なりけり

天喜四年皇后宮の歌合り祝のうを後冷
泉ひけり

後嵯峨院御製

長濱の真砂は数を何ぞ此はかぬ若の御代哉

續人不知

和田津海の濱の真砂を数へて若の手なりの数よりん

紀貫之

若の代の年は数を八百ぬ乃濱の真砂の数ぬけを
百首歌奉らしに対花恋

御製

世治め民を撫安成ぬ八天津日の光を限し

文永三年續古今竟宴歌

後花山院入道前太政大臣

あくよみく玉藻乃おもてに浦浪
貞観政要乃文を題ゆく後作り けり哥

治国如載樹と云心ばえ

卜部兼直

うこゝろのさ大和海根はに常盤木も国ぞ治し神やくらん

太宰大貳国章卿

しけ波をはに弱よう分作りけり

清原元輔

住吉の浦の真砂を苔むりて君をとゝめん行末社思へ

正治貳年百首歌奉りける

式子内親王

君ゆえにたゝ海はのさゝわぬの苔むし思ひ思ひ過

建仁三年和哥所歌合

けり時後鳥羽院御製

百とせ分はちはく枝の代はれ過よ神くも今も老はぬ浪の那

元久貳年新古今竟宴哥

従三位家隆

君流れ玉藻も分ぬ波の上に数ふ浦風

花園院御製

芦鶴多しき国の風として大和国は末も乱れ

秋冥古和謌集巻第六

離別

[illegible]

衣笠前内大臣

[illegible]

[illegible]

中務卿宗尊親王

[illegible]

[illegible]

藤原仲實朝臣

海の方道はもとより別所はさらなり関とかやうの
おぼえは関白殿の御家肥後
京極前関白大政大臣家肥後
頭不知
事の間を定なる紀無と知かりける
大納言成通
約をなすとかやうの様にはなんとそもよりきあるべけ
大願の成らんと云宿願なりけ山
先を尋ぬるに
大僧正行尊
又の収蓋ん事を定てう家に清盛と雖多約束
人の体に見せ侍りて
僧都清胤
ちけり
抜立の別なんを考よりて紀雖
別けん代
前大納言為家
頼朝あよ是代の世のあとを又蓋ん
有国大夫なりて下りける時強盗
前大納言公任
別れ侍りてけり命の外考よ抜蓋んと思へ
参議為忠美濃国に別れ那よりかり侍し時強盗
源頼康

故郷に立ちかへる人の名をあふぎの関をも
修理大夫顕輔播磨守になりて下りけるに
川尻よりくだりて海にうかびて永濃新の往還
渡りて武蔵へ

津守国基

鴻の入れし漕ぎ出でしかたの人きよ海に出でし乗れ
二月朔日法田舎へ行人に

祐子内親王家紀伊

思やるかぜ計はかりふかんかぜ
その海にうかびけるに人の船よりくだる海に

うかべて
厚会法師に逢ひて別れ侍りし時
山へ入りて海にうかべてけるに桜花の
ちるを

曽根好忠

山風は桜吹き散ぬ花のまを立ち隠れ
幽仙法師

別れは山の桜より海にうかべてんぬ花の海に
頭不知

僧正遍昭

おもひかねつ川瀬に流れ出でいかにかくるる神の
百員の侍りけるに対別の人を

遺人不知

心はせをあとに宿よりあるを出て流と知りつる旅の空

僧都覚雅

月よみぬかりをたくぬれ袖と独や山の今宵あらん

前大納言為兼

東の方に向りけるはるかに

凡河内躬恒

足柄の山路の嶺に別なはんれをと絶てうく先

題不知

讀人不知

時しもあれ紅葉をしのぶ袖を寄けりけり

賀方朝臣陸奥へくだりけるに餞せんとて侍けり

別路はいはを踏のそをせあよいかに出き秋の夕暮

中納言家隆

返し

藤原賀方

いかに南風吹ん事はよるべき秋のさそをを

信濃国に侍ける親の許へ後にくりけるの御

延喜御製

故郷の紅葉乃不約旅人を綿とさそをはんん

月乃はしへ乃詠に宿りけるに同じ

玄範法師

無く徒

又元秋詠めも元秋云れぬんよるる命なる袖を

京極前関白大政大臣家肥後

おぼつかはこゝをいとへる洞の外に
修行志侍けり時同行して都より西の方へ
西行法師

なりぬるかなとはるけきに思ひ
藤原定家

別てもこゝを長しとおもふ
藤原為家

なれしかの山路の月
紀貫之

行みつゝおもふ人をみる時は
秋風さへぞ吹きにける

別て後を待こゝろ
大江千里

なれしかの山路の月
殷富門院大輔

うらこゝろ
命婦乳母遠さかりけるを
上東門院

思ひ出の雲井に浪は隔つゝ
藤原爲顕

契りをば先立て
藤原清輔朝臣

頼朝も今は限りの命を知らぬ命はかなさ

前参議教長

人安百首哥

嘆りこん後を思ひ遣るにも別の道をいかゝなるらん

源道濟

別るゝ道やをはしまさん大形の世中かうなるのち

籠業に成りけり女よ月の名しるべをはかハ

讀人不知

都をば月の宮よりおぬとも月うんもの思ふたに宿よ

従三位忠兼

なりゝてわり果ぬ世の後をたい此て別の道を出さ

おきなり心を知て別れ人をとゝ月の光にて老ぬ後

権中納言師時

藤原定家

思ふかよ後を雲井よ宿りゝ空の月は光を西の山

讀人不知

命ありて別の道ハ今はゝ遠と頼をかりて

源實の籠業に湯わうんと多成りけり紀り

山陰まゝく別れ入ぬ西ゝく後

志乃先

命をたにんよるゝ拾ゝは物の別ゝ物かゝ

ゆきてみなきをとゝ頼ゝ孫ハ今ハ別の義なる事

人々別てはゝしけ

神祇伯顯仲

前中納言匡房

ありあけつき

五月廿日よりさなくさ海て先方遠所へ侍て出しき

修行り御侍りけるよ侍る

大僧正行尊

思へとも是なる紀無のたりのさしいつとはめとも元祇孫

安嘉門院四条

あもし

明日知ぬ身を頼むして後ゝ人ゝ出しれ思ふ別を

別れん後

前大僧正實伊

頼ゝ是ハ五月廿日ゝ毎ゝ命の孫

法印實清

命あるハ後ゝ逢見ぬ別をとなくさめぬる神

書見所へ侍りけるよ為孫を侍りゝ

續人不知

思へし是なる紀無の別ハ是ハ紀りはいまゝ

稽古和謌集巻第七

羇旅

人の馬に餞する

貫之

[illegible]

旅の心を

遊義門院

暮きてゆく[illegible]

摂政太政大臣

[illegible]

登連法師

[illegible]

東へ海うけ人よ　中納言兼輔

四方の風のさそふ花よりまつ人の香ぞ

権大僧都成瑜

何くとも定めぬ旅の空なれば宿をかり

寄を捕親物へ海うけ人

旅人不知

おなじ所に年ふる人の家なれば

小町

春は見る人の数にもあらぬ

家は今は見物朝夕よりて見る限り色みてしか

権圓喜法師

なれはさりよりの人猶を契かの命は立つぬ別ちかとも

藤原教定朝臣

たのかなの命をかぬ誘を聞て元私契つさりけ

亘秋門院丹後

あくはいかに成ぬとも契置行ことの色絶なけ色ハ

藤原朝定

霜はなと紅深く染る深山路さそ人の忘て聞

今上御製

旅の人

あはれとしれ山のとかさ色彩旅の道そけるけき

前中納言定家

今宵の風雨に身を落て紛れ給ふ顔の白雲
東へ帰りけり風雨

風雨に紛れ給ふ顔の白雲

前大納言爲兼

旅は道ゆく
行雲て宿の山の雲方
山を

前大僧正道昭

初入の月入あひの鐘

延政門院新大納言

山高し山の雲ゆて越ぬ
旅宿の夜と云事は
明ぬと契ふ帰ぬ

聖尊法親王

羇中霞と云事を

和泉式部

何ゆゑ知ぬ春の霞や旅の空
去は旅は旅ゆく月は人ゆゑ

同

去は春の月をおもはぬ宿て
東の方へ帰りける道ゆく

民部卿成範

道の島は草は青葉の物なれ
関は尾の明方の島は

按察使資明

松山院にて後鳥羽の御ゆめ

崇徳院御製

思ひ出の

讃岐にまかりて侍りける夜、夢に見えたりける事

月をみて

貫之

照る月は海にも空にあらねども

天川わたる舟人の袖

福原の院より河内へ

古里を

なりにしかとて人の御

花京大夫脩範

ふるさとの

讃岐の

秋風

古里

月を

大僧正行尊

あるじ

旅行

月を

旅宿月

椎大納言實家

有くれ

旅

野

住月

正三位家

武蔵

八月

今

源兼氏朝臣

東

遠

八月

月

古郷よりの雲井の月を見て旅の空をなりひさんん

待賢門院堀河

野宿月

夕露は落ちぬるとあるしにく宿りをとめ猿人

秋の山人うさそうきぬ物思ふ袖

前中納言定家

郭公鳴くや里は山路なる

橘忠兼

法性寺入道大政大臣内大臣より給はせ時関路月

中納言師俊

播磨潟や須磨の関屋の板屋月りのもとや須磨ん

鎌倉右大臣

旅寝とる伊勢の浦萩秋ものひとめ柳より宿る月かけ

遠く海かりはる時四条大宮大后宮より御歌

そこを知る分あり

康資王母

旅寝はるたとるとあ秋さりはとりつるさはいて旅ん

従二位家隆

古郷より別れ神といるん志ん旅の外書

世代を見て後世行はるよ海ゆうて

周位法師

和田が原遥に浪は隔きて秋みる秋の
初瀬に通ひてけり道うしてけり

菅原孝標女

物思へば袖に空なる秋とぞ有明の月

雜御所の中宮

後鳥羽院御製

見る人の袖の露はいかゝ

祭主定忠

行くすゑは雲井をもとめ行くとも心の道の

前大納言為兼

雜所中宮

ひとすゑ和なるゝ袖の露はらの後の夜はの

東へ向ひけるに遣水の方にくだりける程に
河を渡りけるに浪はいとはげしく

業平朝臣

いかゞ渡りけるに浦山くもるなみの

成尋法師

入唐の時詠

白浪は多くて海の法は舟さしけるに人は袖をぬらす

前大僧正慈鎮

月影を袖に受てもらるゝかな須磨の浦の海人の

前左大将家の三十首の中に

海人の袖に

前大納言公泰

天徳内裏八十嶋歌合に月のみちてる海辺の清みを

前中納言定家

色紙に人麿の歌を書て入相の浪に月はなくなく

贈左大臣範季陸奥の守になりて侍るに

従三位頼政

ふる郷に見て侍りし君が遠かた秋篠の月を

百首歌奉りし時 藤原為家

神のよはひ頼みをかけて月にて猿の声聞く

皇太后宮大夫俊成女

秋宮拝行は鈴鹿の関の秋猿の猿の声聞くよ

権中納言通俊

嶋中秋と云事を

藤原永光

嶋の秋は実に紅葉山風よ

東三条石山に籠り侍りし時 一条院御製

佐人は秋よ打ちなる田の浪の秋はいとうとうん

大炊御門右大臣

見渡せば遠方の海の秋の月

藤原秀能

都かへ日数をへぬるよりけり白川の関
雲中猿行とふる事は陸奥の国
雲井中にしるし道は迷ぬ跡を分て白川の関

今上御製

深山路は今朝や初る猿の笠白雪ふる雲ぬきの道

大納言経信

羇中歳暮

東路も年も末なりぬんと思ひよりける白川の関

僧都卯性

同じを

大蔵卿隆博

ゆく末は年さへ暮ぬ東路や猿とともに白川の関

藤原隆祐

今日をなほ都しるしと春霞猿ぬ関の明ぬるこよ初

法皇御製

猿のなく陸奥国の遠ければ何くゆの家路をたずねき

高野より帰て侍りける道あく猿

高野法親王覚法

迷はなほ世中は何くを猿の道をたずね

百首歌たてまつりしとき

怪しき物ゝ道より入めるを見れば古郷をかし

大僧正慈圓

後宇多院御時十首歌ありける時

中納言為藤

越えぬる跡は道より宿とかへる山ぬる夜の夢の音かな

熊野より帰りける時住吉にて

後鳥羽院御製

海原はしらなみ立てくれぬとも帰の舟の見えぬ夕かな

龍業法師

故郷に帰る洞はなかりけり八何をか嬉しかるらん

久安百首歌ありける時嬉しき

皇大后宮太夫俊成

和田の浦に立ちや待つらん角田川の水鳥の音は

弘長百首歌ありける海路

信實朝臣

月ぞ澄みくと海の八せとに漕ぎ行く舟の浪の音かな

題不知

隠りなく思ひ知れと和田の原漕ぎ出て見れば未だ浪

讀人不知

稚古和謌集巻第八

哀傷

友則子侍りし時　貫之

[illegible]ぬ和子と思へと書ぬ　今八人社出[illegible]りけ[illegible]

僧正遍昭

題不知

[illegible]

意寛法師

[illegible]ぬんをはまき間は前[illegible]

従二位家隆

正三位知家

人の世の果はむなしき夕煙雲となりて空よ消て

頼不知

積人不知

朝家を消縁りて色々の雲の山世界彩られ見

西行法師

なれ人を色無ふ色帯ハ眼の内は愛とそ

西行法師百首歌中り

前中納言定家

世中を命新宿り場はをみなれりとも彩まきハ

前大僧正玄円

明るとも今を迄を又烟消ぬ身は義しけるく

月はあれ秋二番を後二番院は御世乃

事はたり絵りしく

西東門院

雲はなれ乃を野原ぬ

前中納言定家

色ハみかむるき抱は白田

病り作りは秋の田紅葉かな消れ一時

大江千里

も袖多人乃涙り

紅葉は風よ消り切てみなれはけなれ物を金りは雪

世中をはかなき夜の月かなと
　　世常
　　式部卿郊省親王
　　中納言定家
　　前大納言爲家
　　良空上人

徳てを変なる世のなきハ所なり墨染の衣
水はなとり思ふなかゝれるかゝれ
　　後二位家隆卿
　　先師覚観上人
　　源重之

有果はなしひさはてとなる
　　積人不知

さるをはかるしるしはなかるしかるへき
水はなよ流るゝ法を思ふ風
　　観泉岸額離根草
　　和泉式部

て積けり雪中よ
霧と雲草葉の上と思ふ
　　贈後二位爲子卿
　　式部卿爲氏

す秋はけり雪中よ月前思故人

なれる袖の形見とは思へど袖の露のけぬる秋かな

従三位為理

題不詳

惟高親王

なきなくて蒙る宿の袖に雨と涙とふりぬれば

贈従二位為子朝臣

前僧正道性

思ひかねる余りの涙ひけりさるる道のはきぬ

前大納言為世

返し

さるる道の露の命にもうつりて袖の色ぞうきぬ

歌事ありければ詠ぜ

近衛関白大政大臣

明暮は身をも離れぬ面影の忘れぬ袖はかりけり

浄土寺入道前大政大臣

時雨ふる袖なく濡れぬ面影はかり濡れぬ物思ふ

前大僧正公豪

寄夏山帯

夏の山の中を

連智門院兵衛督

夏の山の中を焼くなる人の約て消ぬ限りなん

僧正澄経

久安百首哥よ

前参議教長

水はなの面よりあるあの猶しなし　流れ金沢地とやいふ

頓阿法師

蟬の声ぬけ殼に法師の声ぬけ殼

空蟬は世のはかなさを思ふよりなれわたるぬ樓はなし

前大納言為世

空蟬をしるまもなきはかなさに卵の殼

新院御製

樓はなを新しく植くらん昔ありぬ世を思ふ人

大納言公任

昔ありぬ家は世を人なれはなれとみる樓

従一位倫子は思ふ人

中務卿宗尊親王

はなくさを是は形見とうつさはて身よ涼はは洞ありけり

上野宗雄

源草は水人の樹しんわうし　今年ハ是涼うさけ

姉小路実世

蟬を始はは聞はなりてもうきみけりおをとも志うきとそ

壬生忠岑

藤原はるかの房の中に桐ありけるを人の折ま
りけるを聞きて

閑院

さきかぬる梅はいかなる人の袖ぞ
河原はいかいかなる人の袖
のかをりを袖にうつす紅葉はいつ
なりけるぞ枝にのこりけり

近院右大臣

おもはぬ人にもあるかな紅葉をば
立ちぬ宿はいかなる人の袖ぞ

貫之

色をも花にもあらぬ人の袖をば
立ちぬ家の梢ぞ

藤原範永朝臣

植ゑし人の形見とぞ宿の梅ぞ
花山の院にはべりける僧正遍昭の室に
けるとぞ

津守国基

立ちぬ住吉の梅の長むしろ
年の内にはるの来ぬるか

藤原是基

為家をなげきあまりおもひけし和歌を第六にぬき代
花してよろこびのよけ所侍る

業平朝臣

旅よりの道にハ稀く用しかれ明る今ハ月思ハ為を
甲斐国より相模へ行て侍りけ人行んとて海り
けり道中わく御よ病侍りていまくとりよ
ゆ侍て京りもあまりて世よ見ぬ為とと
て人よ告侍りけ

在原滋春

仮初に行ひちらせ思るう今ハ限りれ門おりける
中家くしの年の秋御ぬれ京都よ家の

天暦御製

秋風ちなひく葉葉ハ家れ清ぬ人を行ようたん
妻よ海りとれ又の年ハ秋月を見侍りて

人丸

去年今年秋の月哉を照ら為も垂ぬ姉ハ為侍る

頼不知

心ハ為ぬ世よ為へ美深ハ哀の神の業ハ為
世中ん為ぬ為ては為なれん為侍り
為ハ公忠朝臣の海り侍りけ

讀人不知

此間病おもくなりにけれは

手にむすふ水に宿れる月影のあるかなきかの世にこそ有けれ

紀貫之

題不知

世中は何にたとへん朝ほらけ漕行舟の跡のしら浪

沙弥満誓

題不知

山寺の入相の鐘の声毎に今日も暮ぬと聞そ悲しき

読人不知

法師にならんとて出ける家に書付て侍ける

浮世をは背は今日もそむきなん明日もありとは頼むへき身か

慶滋保胤

左大将済時白河にて説経せさせ侍けるに

今日よりは露の命もをしからす蓮の上の玉とちきれは

實方朝臣

極楽を願てよみ侍ける

極楽ははるけき程と聞しかと勤て到る所なりけり

仙慶法師

市門に書付て侍ける

一度も南無阿弥陀仏といふ人の蓮のうへにのほらぬはなし

空也上人

覚仁法親王

清澄なる水は法のわりとはみて菴をけり
なれんと
前大僧正道性
面影をんよおぼゆる秋の月
前大納言良教
墓のやうをみると聞てなきあかすえぬんを
慈覚法師
聞あんをはきき同はあるよ
権僧正慈尊
風ちる海のいの家ハしをとをぬ
権僧正慈淳

定常はあるとて
同源の世のはかなさて聞ゆ極しけれ年と四十九
大納言長家大納言信の女よ位ありけるを
女房ありけるは法性寺よ籠りをくらけるよ
法ゆうは
大貳三位
出て成りを思ひなくさめよ法ハ海の気は
返し
大納言長家
彼をみるとの海のきしよハあ稲をを海稲を行を出るき
仁和寺法親王蓮花門院やくくしをけ後
月ゑの日彼墓所よ海りけるよ山よ雲無りて

山ずゑ遠く霞みわたる

覚蓮法師

山ぢかき柳の糸の春風に乱れぬ煙の色ぞなりける

新勅撰集 詞書和し侍りける

源頼

世中を何よもすがら風吹くと聞くぬ嶺の松の雲

一条院の御事ぢ上東門院枇杷殿にまゐ

いらせ給ひける日読侍りける

紫式部

うき雲は晴れぬ空にぞ思ひ知る

いかなる時の月を見て

梅壺女御

月ぞ見ぬ今日はいかなる時ぞと

待賢門院堀川

春なれど月よりほかの花もなし

世の中のうきぞ知らるる

藤原高光

世中はかくこそあれはかなく

思ひ知りぬ常なりけり

世をさとりて名なし人

はつなくをたくはひ家を知て人は義を神のしるしけ

陳は寺の鐘の名称はすなわち

一聲は鐘の音にて義を聞いるる人のとりなるん

天台座主澄覚

絶えぬ道はなりわるる物はいつまくとて世情はん

正二位知家

月は秋を雖上人は詠て義の姫宮

なとを多ひよりて作りけるよ和歌うて後世者

乃物語因りて彼月日を當りける財産

慶政上人

秋の月なくまあるる和んの郎

藤原伊長朝臣

今日聞くハ金の義を変の聞くも歌く和尚も実者のこん

西行法師

ふくよ義をくきは世はなれとなれとも

源保綱

出は禅寺一人を元亨は果はゆ乎乃烟なりけり

亀山帝はんを

六条院宣旨

世中は未来り勉る家は家ハなの家は金はんやハこる

寄夏山常

津守国基

乱馬の音もいとゝ頼しき世の中ハ夏はなを惜

大江廣秀

烟立て夏と海士に限ある人の命のそてはなを

誓古和謌集巻第九

戀哥

初恋

素性法師

見ぬ人をとゝひとりよ思ひそめ初めを恋の始めなりけり

前中納言定家

限なくまつ見ぬ人の恋しきをやゝ深く契り置けん

二条大皇大后宮肥後

まつ初て恋を思ふ人ハ皆よ百夜ハ千夜なりけり

参議雅経

今ハやと人よ思ふ思ひ寝てそ初めの恋

思ふとはなれぬ物を夢風の
まとゐ
紀友則

契りありて逢ふ思ひの箴波根の峯の松の絶えざる
権大納言公藤

思ふ人絶えぬ深くは
中務卿宮
前大納言爲兼

紫しをりの花の匂ひ
延喜御宇
源重之

箴波山峯の松山
皇大后宮大夫俊成

思ふ人の心を極めぬ
権中納言敦忠

袖思ふ人の糸のわが袖
前中納言有忠

恋の山入て入て
等持院贈大政大臣

なほ思ふ人を
天暦御時歌合

壬生忠岑

前大僧正慈圓

清少納言

廣義門院

續人不知

皇大后宮大夫俊成

藤原清輔

後押小路秀能

前右大臣

隆信朝臣

春とをぼえはなくさかんなる外よりはるかなる

遊義門院

春とをぼえよりあやまんまことはいまはるかなる

権中納兼季

思ふとは色にはいでぬ恋ゆえ

皇大后宮大夫俊成

いかにして知るべきなるこの山の奥の通ひ路

寄霞恋

賀茂重保

はるかなる人のかよひや垂水の関路の霞たちそめん

天暦御哥

西四条殿家礼詠

権中納言敦忠

匂ふ梅の花を見るにたちかくれけり

雅子内親王

打ちかすめ匂ふ花の梅ならぬ春の霞ぞ

春はなほ霞のうちとあきけるに梅花盛り

なる宿のみ恋ひ行くにはなほ春の

うちにあくるをいとはけり

藤原隆信朝臣

花しさへ人のわかるゝ春風のたちかへりてもなくや鳴ぬ

讀人不知

返し

知らぬ身の行末情かけ稀に梅し匂さそはれてはいかゞ見

坂上是則

我恋しくてみよしのゝ山の桜花咲ちる夏も数は波さうし

卯月朔日人にはべりける

前大納言長雅

思ふ事薄くやなれる夏衣袂も涼しかりける季

日比としふ指さりける女の許へ卯月まかり

て卯花のさきてはべりける

讀人不知

明暮に目かれぬ垣の卯花の浮世の中に隔てしもせよ

返し　小馬命婦

いかにして目かれぬ垣の卯花の花よりはまてや忘れける

久しく音せぬ人の許へ祭の日葵つかはしける

讀人不知

忘れずもその山の葵草今年も祭りて思ひ出でずや

返し　参議経盛

今はゝや思ひわかれん葵草神まつりけぬ日ぞなき

歌宴女御里うつりしてくらげ流る月なりて
はるの夜の夢ばかり
天暦御製
里うつりせし嶋潟のなみの音に
時はすぎぬ
女御徽子女王
時鳥なくこえ聞かぬ人にしかりけり
五月雨さしぬりさして人れ帰りはつる
けり
小町
葛蒲葺人の袖の色にしるべけれ
五月一日は雨降けれども
後とく

皇太后宮大夫俊成
神なびの山の雲の雨はれぬ
家集
前大納言隆房
雲ぬけて月の八重の雲ぬけて
月の雲ぬけて
従二位為實
五月雨は人の思ひをけたれて苦
ひとつ人の思ひをけたれて
伊勢
七月十五日女の御ぬ

多くの年月を経て八重垣を重ねよりて閑居の邸
過徳の人を思ひとりあつめ
法成寺入道前摂政大政大臣

雲井より八潮の波と共に寄せ来る閑居の邸に
人の絶へ間なく
侍人不知

秋風に吹きまさりて今宵は八重の霜敷く
中納言家持卿
延喜御哥

秋萩の露を分け来る鹿の涙を知る人
秋の夜の長き思ひの長夜
後深草院少将内侍

秋風の吹き通ふ人を恨みて出でぬ
前参議為相女

袖の露の長夜の長夜
閑居の人の袖を絞り
貫之

秋風の梅の香を吹き通ふ袖を恨みて
椎の下の人の袖
権中納言定頼

聞き初めし雁の音の響き世に
秋の夜の恨みを

冷泉院太宮とけ時分りけ中り

重之

なく鹿の心を聞毎に枯野の草こそ物を枯なれ

三条右大臣女御に侍へりける

清慎公

秋ゆゑ多物へる女郎花我身ひとつ色ぞ思ふ

八月はつ月夜に人の家へ侍りけるに

みさゝ山ゝ月ゝ

相模

紅葉ゝ折ゝ枝の月新も重ゝ上ゝ八ゝ

二十首寄せ侍りける中に

従二位家隆

なを紅葉する神よ八ゝ宿ゝ

四ゝ手ゝ作ゝ侍ゝ

長ゝ月ゝ夕ゝ月ゝ多ゝ

建禮門院右京大夫

夕月夜の松の間の紅葉

光明峯寺前摂政

三笠山紅葉する枝の多ゝ

辯乳母

契りこそ老いてなほかなしかりけ
中納言為忠
ぬれて宿り人の思ふにあはぬ声
杜鵑声

いてしの思ふにあはぬ声の
五
中納言兼輔
和歌所にて人々に
恋の歌中に
貫之
若草の波を枕にせしかやの
空を秋の夜の
大御門院御製
行幸の深草の山の深草
ぬ思ふの末を煙にもなる

中臣祐賢
思ふ人の深草を思ふあまり
金葉の人々に
元俊朝臣
恋歌
思山岩根の松の枕にしかとも
下紅の水の底にはかもしか
大蔵卿重経
いてしの程をくるるあはれ
藤原基隆
後朝恋
明ぬと雨にしんの鳥はは
土御門院御製
暁恋
きぬぐの別や袖を出きと
暁ぬの雨もれ

暁恋　　従部忠重

暁をいとはぬ契てひとりあかしの月をなかめつるかな　　従三位保季

同

夜をあかす通路をとるとも月をもの思ふさとのあけぬる　　真昭法師

寄月恋

秋の月やゆのあかつきのあけぬるとこの月の

寄枕恋　　前中納言定家

ちぎりをかはす袖を雲井の月ぞ枕をかたしかはるとも

寄夢恋　　前左大臣

夢をとてなれり思ふ空蟬の世はかりぬ人のなを

題不知　　前内大臣

世をうしとたにもまこと方をこの恋を命限りあるらん

恋ゆゑ限をしれる世なりとは年々思ひさらぬ

伊勢

深山ぬくるに世をうきしかの秋をけ

恋をのみ嘆のをそ重ねの同じけり　　右兵衛督為教

恋ゆゑ嘆のをそ重ねの同じけり

恋ゆゑ年月をいとはるるけ命あるらん

行色

前大納言實教

[illegible]

題不知

前中納言資季

[illegible]

前大納言良教

[illegible]

六百首歌合

前中納言定家

[illegible]

参議雅經

[illegible]

貫之

[illegible]

長月の夜の明方の月

延喜御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題不知

[illegible]

[illegible]

貫之

いく秋人をとゝん曉のあぬぎやなれ似そりと
人乃袖しほるらけ

右大臣

くまぬよ行を馬はせ絶てなけとひ見ぬ物をそ
けの

摂政太政大臣

梶をとゝ人中良はしぬ湊よりる舟はそりそ初ぬ異はは塩風
女よ波乃つけ

藤原義孝

いはまくはは命をたゝぬ世中よはき歌のやはかしをる
面白はは物の烟をなは中をとりるとりるとしかりけり

家隆朝臣

能波祢の嶺の月みるの川を拾て閑とりけり

陽成院御製

はをとなれ人乃ゝを宣蟬はひるき色よ家はやうゝん
是をとなれ別よりやせん義はより色見命ゝ稀て

八条院高倉

藤原知家

ゆきの地や人乃袖ん初ゝ月乃色

定家朝臣

西新乃ゝをぬ人よりをとゝ秋乃夜はは

肥後

人とゝはゞ頼みなき月をうきてむすまぬ蓬生の宿

藤原秀能

うくものゝ人とゝはゞ恨んとまぬ打ちあるゝよ

西行法師

今とゝ知る思ひよりも樂しきをけふ

皇大后宮大夫俊成女

百年

家捕ふ袖見る枝のしをれく又畢ぬ美うゝ面者

相模

名ばかりの恋の下葉ばかりてもなほ人のわすれぬ

藤原重顕

知ぬ思ひんゝ中くよりもなほ人のうらもうらめしん

従二位爲信

家憂恋

人ゝ思ひ知りぬ思ひ八ゝ神よりも憂かりけ

藤原清經朝臣

ほきてもあ我りゝの烟しゝとは今ゝ知りけり

今出川院近衛

思ひくゝ深ゝ知ぬ出ゝ多ゝ涙ゝ袖ゝ不ゝ乾

藤原雅朝

実ゝ思ひ知らぬ涙ゝ袖ゝ乾ぬ

郁芳親王

松の緑はかつぬる袖に恨てもたれかは洞の月をもかこつ

源兼康親王

春夜や過ぬらんと思ふ山の端の月にあかぬ別れ

中務卿恒明親王家肥後

約束はいつ契りしやかつぬる袖の命なりけり

三善春衡朝臣

待絶て涙ぬる袖の露の命は月にぞ消ぬべきかな

廣義門院

月の内の月さへ雲やいとふらん別れ顔なる夜半の面影

法皇御製

あはれとは思ふ限りの別れ路に神の手向の月

今上御製

暁恋

恋しさの慰めもなく夢覚て洞の月をぞ見る

土御門院御製

旅恋

別れ路の袖の涙を思ひ出て故郷の月

従二位成資

うつし人の涙の袖の露よりも後の形見をぞ思ふ

前関白左大臣

遇不逢恋

今はとて思ひ絶ぬる面影はいまぞ形見の月をぞ見る

後鳥羽院御製

久堅の月新たなる秋の夜の雲ぬけてのこる光なりけり

後人不知

垂乗の跡ゆかしきかな烟立て雲と果てし名残り

貫之

垂乗の人を命わかくいかる秋の頼をけふ見

院御製

徒然の閑つれづれ神の上に宿りかたぶく月を恨て

平宗信朝臣

ゆふけ立て秋ぬる神の名残かな哭りかなる四方の山々

侍従

偽れる思かなる行末の嶺の月

大江頼重

みかゝる神代ぬる月を見るかな哭りかなる山の端の月

藤原春宗

哭うるん春雲よ行方なる遠の通ひ路を哭るよりなり

二品親王覚助

相乗恋

遠き人の八人をもりさしはひを哭を中秋

如法三寶院入道前内大臣

家乗

徒よ垂乗の浦よりも人の知神乗と今を哭れ捨身

前大納言為世

贈従三位為子

元亨四年二月内裏にて十首歌せられ
けるに不逢恋

後光明照院前関白

逢ふてはかりそめ命をいのるかな
前中納言定家

逢事はかりそめなれはなほ神の
如寶三法院

逢ふてはかりの別の名残をも
皇喜門院別當

思ひ侘ぬ神の心やあるらん
前中納言定家

琴の音を聞人の袖に契
法皇御製

乃人の面影ちらぬ一世よりはかなき
権中納言敦忠

逢みくはなのんなるものなれは思ひさりけり
右大將道綱母

歌に神あり事の聞るなるへしとは
重之

恋しきはなくさめかねて菅原や伏見にきても寝られさりけり

読人不知

蜑のかる藻に住虫の名はさけしも我からねはまさりけり
人かりけて

春宮大夫公実

白菊はうつろひぬれと色もかはらぬ梅は冬のゝ秋しなくとも

皇后宮女御別当

惜からぬ事の葉もたえし物を何か惜からるゝ命そ

中原章経

恋侘る身に逢てふ事の葉ハ偽さへそうれしかりける

大納言経信

逢事はいつともなくて哀我しらぬ命に年を経るかな

前大納言経顕

頼恋

たのめくなおはれやとめ偽の契もさらぬ限りあれやは

藤原隆清

寄月恋

かゝるねも中くはましに待夜れ月を待面影

邦省親王

忘恋

忘らるゝ袖の八重雲はれ夜半の月見てや似たる影も恨し

藤原親方

月前待恋

さらぬ世の人の心をはかりけれ猶しそ思ひ知らるれ

関白前太政大臣

わすれねば面影ばかりさきだちて行く月よ人をまちかねし夜

前中納言定家

恋侘びて我と詠むる夕暮も馴るれば人の形見なりけり

西行法師

月前恋

忘るとも見る人あらば思ひ出でん月のかよひに宿かさねんと

権中納言定頼

待くらす夜なかむ影の恋しさはなぐさめ難き物にぞありける

遊義門院

何事のうかりし物と行人の心のかはる世中

前中納言定家

さのみやは人を恨みもはてざらん袖よりわたる袖の涙を

寄衣恋

源兼康朝臣

遠ざかる人は空蝉の夜衣かれてはさして秋風ぞ吹く

前参議為相女

物思ふ身はかゝりけりの長き夜より難面人を待あかしつゝ

前中納言定家

久恋と云事を

それをだに忘れやすらん今更に通ふ心を夢にみるとも

西行法師

とにかくにいとはまほしき世なれども君か住むにもひかれぬるかな

道信朝臣

名所恋歌

源有長朝臣

高砂尾上の桜咲にけり峯の霞も立なくに

藤原隆祐

題切恋

いとせんの雲井の人の命をしたちかへぬ身と知はや

従二位兼顕

あかつきの空の雲の月をまちてこそ

紀貫之

吉野川岩浪高く行水の

読人不知

恋しきに堪ぬ涙の滝なれや

絶ぬ物思ひの川のうきしづみ

典侍藤原真子朝臣

袖の雨の降ぬ日もなし

読人不知

たのもしの山の中よりあらはれて

女郎花の露

徳大寺左大臣

いく秋雁の音を聞くらん

藤原重基

逢事の年月を契ハ命やは

恋のなりのぼるらん

夏中契恋

月夏はなほ見るこゝちせぬ秋の夜の
初雁後思恋と云ふ心を

大皇大后宮小従侍

今更の恋とぞ思ふ忘れ草
又ぞ生ひぬる人の心は

二条院讃岐

朝神楽乱て恋を志ろしめす

良暹法師

春の夜の夢ばかりなる手枕に
かひなく立つ浦の波風

入道摂政

春日社八首

朝神楽乱て恋を志ろしめす

後京極摂政

浮舟は使を知らぬ浪路にも
向ふ方の多ぬる見

前中納言定家

恋俺て秋と称る夕暮に
人の形代ぞ

前大納言教長

なほ〳〵て又逢事し知ぬ
身は形代の名月

寄水恋

近衛関白左大臣

逢みくとは見ぬ水に数見るぬ
契ぞ掛ける手

前参議雅有

道ゆく秋のをしまれぬ袖の露

旅人不知

あくがれの袖の間よりあらはれて月をもすまぬ雲の色かな

前中納言定家

初雁の音ハ聞かとも暁ていとしけ

寄鏡恋

御製

物思ふ人のほうさの境鏡ありけ

法皇御製

見し人を面影ちらす月ゆ